



文の階層構造と発話行為 : C類とD類の細分類

蓮沼, 啓介

(Citation)

神戸法学年報, 24:1-39

(Issue Date)

2008

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/E0038408>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0038408>



文の階層構造と発話行為

－ C類とD類の細分類－

蓮 沼 啓 介

南不二男『現代日本語の構造』大修館書店、1974。所収の「文の構造」において展開された文の階層構造論のうちC類とD類を細分類する。

南1974の例に倣って階層構造論のあらましを窺って置く。

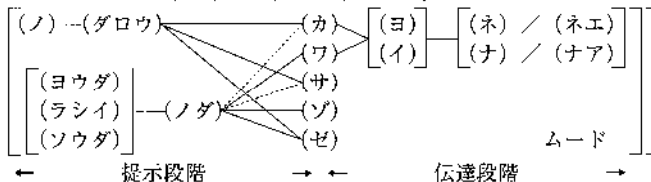
従属句や従属節の種類によってその中に登場する語句に違いが認められる。ナガラの如き従属句の中に入る語句をA類とし、ノデの如き従属度の強い従属節に入る語句をB類とし、カラの如き従属度の弱い従属節にのみ入る語句をC類と分類する。従属句や従属節には入らない独立句はD類とする。一例を挙げると次の通りである（133頁）。

（荷物ガ）横浜ニ ツク A類
キノウ 荷物ガ 横浜ニ ツイタ + B類
荷物ハ タブン キノウ 横浜ニ ツイタダロウ + C類
ソウダナ、荷物ハ タブン キノウ 横浜ニ ツイタダロウヨ + D類

階層の名称について。四段階の階層に次の如き名称が付されている¹。

1 南1993 p52 図8に諸説が纏められている。

蓮沼昭子1991に掲げる文末モダリティ成分の相互承接を示す表により提示段階と伝達段階に用いられる成分を示せば次の通りとなる。



描叙段階／判断段階／表出段階／伝達段階 (林1960、p44.p120)

描叙段階／判断段階／提示段階／表示段階 (南1993)

A類 B類 C類 D類

修正提案を行って置く²。陳述論との対照は下段の通りである。

但し、伝達段階の成分には提示段階の成分も含まれていると解される。従って伝達段階の成分であるカやヨやネが提示段階の成分に特化した形で用いられることがある点には注意が必要である。

因に陳述とは私見によれば伝達段階に所属するD類の語句が提示段階に所属するC類の語句の意味を担い代理を果たす作用のことである。その背景には発話における伝達の優位という観点が潜んでいる模様である。

- 2 林や南のいう判断段階を選叙段階と呼ぶ理由は次の通りである。すなわち、この段階では話し手の独自の判断は下されてはいないからである。話し手が行っている操作は、いわゆるメンタルプロセッシングであり、確立した語順の慣行に寄り添いながら語列の選択を行っている段階であるからである。別の言い方をすれば表現の内容に合わせて語列の選択を行っている段階であるからである。

南1993がそのいうB類に当たるこの段階に判断という名称を付与する根拠であるが、それはB類の語句には、～ガで示される主項とそれに対応する述項の関係が出現することに求められている (p86、7.7)。だが主項と述項の関係を支える判断は一般人が下す一般的な判断であり、話し手が話の現時点において下す判断ではない。話し手は一般的な判断の集積として成立する一般的な知識に沿って確立した語順の慣行に寄り添って語順の選別を行っているだけのことである。要するに一般人の下す一般的な判断を踏襲しているだけのことである。

提示という名称について補足して置きたい。南1993では提示という名称が採用されてはいるものの、提示とはどのような操作であるかについては、ほとんど説明はない。提示と南の呼ぶ語句の事例が挙がっているので、意味するところは透明である。だが、提示とは誰が誰に向けて行う操作であるのかは不明のままに置かれている。提示とは実際には話し手が自らの内心において話し手自身に対して行う操作である。従って、話し手が外部に向けて行う表示や聞き手に向けて行う伝達とは一線を画する操作であることは南や林が言う通りであるが、にも拘らず、話し手が自分に向けて行う操作であることは見逃されたままである。

その原因は思うに訴え型の表現類型の捉え方にある。仁田1991のいう働きかけという表現類型の捉え方に問題の根がある。訴え型の表現において示される話し手の心的な態度とは何なのか。ここで事実確認的な発言と行為遂行的な発言を比較し対照することが有力な手掛かりとなる。確認される事実に対応するのは遂行される行為の筈である。だが、仁田や南は話し手の意向に引き付けて解釈している。遂行される発話行為そのものではなくて、発話によって引き起こされるかも知れない結果

描写段階／選叙段階／提示段階／伝達段階（蓮沼）

叙述

陳述

（渡辺）

本稿の結論の骨子を先取りして陳述論との関連について予め解説を加えて置く。

に向かう話し手のそれを望ましいとする心的な態度が訴え型の表現において示される心的な態度であると仁田や南は位置づける。しかも発言により遂行される行為に向かうというもう一つの可能な説明について触れることなしにである。

もののあはれ論に繋がる心の発露が言の葉であるという国語学の伝統の発想にそれは直接に依拠していて、心の内なる待ち望みを言い表す語句であるという位置づけがなされている。しかも別の解釈の可能性には目を閉ざしたままなのである。

鎖国の学問である国語学の体質が露呈した箇所であるといえそうである。

もう一つの可能な説明に従えば、行為遂行的な発言については発言の時点において話し手が発言に対して示す心的な態度が訴え型の表現に示される心的な態度であると位置づけられる。この場合、発話を構成する表語の部分は話し手の内部にあって、話し手の一部と位置づけられるから、これは話し手が話し手自身に対して示す心的な態度の一事例ということになる。

こうした自己言及的ないし自己準拠的な態度を説明するには個人をシステムとして捉えるシステム論の新たな展開によって獲得される観点に立つことが必要である。

伝達段階について一言。聞き手に対して話し手が話の現時点で示す心的な態度は伝達のモードと呼ぶ方が分かりやすい。モードは日常の日本語では情緒的な気分のことであり、聞き手に対して話し手の抱く感情や配慮などを示すのにふさわしい用語であるからである。提示される事態に対して話し手が示す心的な態度と提示される語形に対して話し手が示す心的な態度との双方を提示のモードと呼ぶことにし、聞き手に対して話し手が示す心的な態度の方を伝達のモードと呼ぶことを提唱したい。この場合には提示のモードのうち提示される事態に対して話し手が示す心的な態度を認識モダリティと呼び、提示される語形に対して話し手が示す心的な態度を判断モダリティと呼び分けることが適切であろう。

提示される語形は話し手の内部において話し手の責任において形成されるものであり、それゆえ話し手の一部に位置づけられるものにほかならない。従って判断モダリティは本来は自己評価ないし自己点検の産物であり、それゆえ自己言及性ないし自己準拠性という循環的な特質を帯びることは避けられない。

描写、選叙、提示という段階は西周の訳した『桑岐氏著心理学』（明治12年刊）という表現力、再現力、反射力という知の能力の発動にそれぞれ対応する段階である。これに対して伝達段階は知の能力に加えて情や意の能力も合わせて発動する段階であると言えよう。

C類をCの1類とCの2類に分け、D類を五種類に細分類する。

南のいうD類は従属句に入らない語句である。明らかにA類やB類やC類とは違った規準で分類が行われている。従って、A類やB類やC類と並列するのではなくて、異なった種類の記号を使うことが望ましい³。むしろΔ類と呼ぶ方がいい。Δはデルタである。

Δ類に当たるとして南の挙げる例文は次の四種類に下位分類される。

Δの1類。思考や感情の表出を担う語句である。 単独詞と呼ぼう。

Δの2類。伝達意図の表出を担う語句である。 伝達詞と呼ぼう。

Δの3類。発話の表出と伝達を担う語句である。 遂行詞と呼ぼう。

Δの4類。発話の相互承接の表出を担う語句である。 連結詞と呼ぼう。

更に、南は例を挙げてはいないが、文章表現のジャンルを示し目的を語る語句としてΔの5類がある。 類別詞と呼ぼう。

山田孝雄のいう「陳述」を担うのはΔ類に含まれる語句である。陳述とは陳べ述することである。言い換えれば開陳し叙述することである。開陳とは思考を表出する操作のことであるし、叙述とは叙景を伝述する操作のことである。思考の表出と伝達に当たる概念である。林四郎のいう「表出段階」と「伝達段階」に対応する概念である。文の素材と話し手の態度を示す dictum と modus という用語を用いれば、modus の世界にはC類とΔ類が含まれることになるが、うちC類は「統覚作用」に当たり、Δ類が「陳述」に当たるということである。

山田孝雄のいう「統覚作用」とはとりわけCの2類のモダリティ形式のことである。命題内容と命題態度からなる命題という全体に対して話し手がとる態度のことである。

発話行為論との関連にも触れて置く。

3 A類とB類の区分とB類とC類の区分が異質である点については、尾上2001、351頁に掲げる序列表を参照されたい。

文の階層構造と発話行為

A類、B類、C類の語句は Locution 表語行為の成立に寄与する語句である。

Δ類の語句は Locution 表語行為ばかりではなくて Illocution 表語内行為の成立にも寄与する語句である。

南1974が挙げる例文の中から提示と呼ばれる語句を取り出して点検して見よう。

提示

西ドイツノM市、ココへ 我が社ノ 若イ 工員ガ 毎年 十名ズツ 派遣サレテイマス。

自己提示

151頁

七時ノニュース（ニュースの最初にいう言葉）。

モジリアニトユトリロ（画集の題）

松村呉服店（看板）

スナックNOW

107頁

東京外国語大学アジアアフリカ研究所（表札）

弁護士花村敬三（表札）

新アスピリン（商品名の表示）

グレープフルーツ一個100円（値札つまり商品名と値段の表示）

輸入チルドビーフ100グラム190円（値札）

Kマート（スーパーマーケットの看板）

172頁

東京大学物性研究所（表札）

伊藤秀雄（表札）

古本説話集の研究（本の名まえ）

提示語

169頁

地球ハ回ル

空ハ青イ

ココノ園地ハ 芦花公園トイイマス

佐藤サンハ 経理課長ダ

自己提示の事例が並んでいる。自己提示における自己準拠の在り方に目を向けて見よう。画集には図画だけでなく題も含まれる。題名は題名自身にも言及する自己準拠的な側面を有する語句である。値札は品物だけでなく値札自身にも言及する自己準拠的な側面を有する語句である。題名は画集の一部であるし、値札は商品の一部である。

自己準拠は自己言及とも自己参照とも言う。話し手が話し手自身に言及する言い方のことである。自己準拠に応じて、伝達のムードは除いて考えれば、モダリティに二種類の区別が発生する。

自己準拠について解説して置く。ルーマンの唱える社会システムの理論によれば社会システムは自らの要素を自らを判定規準に用いて判定する。自己に準拠して判定を下すということになる。しかるにこれでは決定すべきものを決定の規準に用いることとなり堂々巡りは避けられないのではないか。論理的に言えばトートロジーつまり同義反復に止まることにならないのかという疑問が発生する。自己準拠と同義反復はどこが違うのか。同義反復は自己のみに言及する言い方である。自己の反復であり、繰り返しである。これに対して自己準拠は自己ばかりでなくて自己でないものつまり自己の外部に広がる環境をも参照する。ここのところに自己準拠と同義反復の違いがある。

もともとルーマンの理論はシステム一般の理論である⁴。会社とか大学といった組織体からなる社会システムばかりでなく、個人の心理からなる心理システムや生命体からなる生体システムや更には自動的に作動する機械システムからなる自動システムまでもを並列して、こうしたシステムに一般的に認められる特性を取り出し分析を加える理論である。

システムの基本は自他の識別にある。システムは外部と自己を画する境界を設定するものである。境界設定によるシステムの内部と外部環境との識別

4 ルーマン『社会システム理論』上下。蓮沼啓介「個人というシステム」(神戸法学雑誌第59巻4号掲載予定)。第8章第4節にいう「期待外れ」Enttäuschungは「見込み違い」のことである。

がシステムの根本であり、存在条件である。システムは自己を保存し存続させるために外部環境に順応し適応する運動体である。こうした適応に失敗すればシステムは自己崩壊を免れないことになる。

ルーマンの理論には個人というシステムは登場しない。個人は心理システムと生体システムに分割されてしまっている。ドイツ語の事実可依拠する限り、その統合を企てることは困難であるからである。これに対して日本語の事実にはルーマンの思考枠組みを当てはめれば、簡単に個人というシステムを分析できることになる。心身一如が日本語の常識であるからである。個人システムを分析して個人の外部に他者として別の個人が登場する有り様をその相互作用として捕捉すれば、談話や会話の展開を話し手と聞き手という向かい合う複数の個人システムの相互作用としていとも簡単に解析することができる。

ここでは人称的な世界の存立構造は透明である。

さて南1974の挙げる自己提示の事例はどれも自己を外部に提示するものであった。ここで自己提示には自己を自身に提示する側面も含まれていることは見逃せない。

話し手が自己を自分自身に提示する側面をあえて取り出して見ると、話し手が自らに対してその心の中で提示した語形に対して抱く心的な態度をも極く簡単に説明することができるようになる。

自己準拠は自己言及とも自己参照とも言う。話し手が話し手自身に言及する言い方のことである。伝達のムードを除いて考えれば、自己準拠に応じてモダリティに二種類の区別が発生する。話し手の心の中に提示された事態に対する心的な態度と話し手の心の中に提示された語形に対する心的な態度とが分岐することになる。

自己提示を自己に対する提示に絞って解析を加えると、提示という階層が言語行動に占める位置が臍げながらうっすらと浮かび上がって来る。

ところで階層構造とはそもそも一体何なのか。言語行動と階層構造の関連を探ってみよう。特に言語行動のうちに思考操作の占める局面に留意しつつ分析を進めることとしよう。

A類B類C類は思考操作に見られる素材の層を示す。思考操作は一方向の動きではなくて平面における左右への双方向の動きからなると推定される⁵。

← (荷物ガ) 横浜ニ ツク → A類
 キノウ 荷物ガ 横浜ニ ツイタ + B類
 タブン キノウ 荷物ガ 横浜ニ ツイタダロウ + C類
 荷物ハ タブン キノウ 横浜ニ ツイタダロウ + C類

これに対してΔ類は音声操作の水準における階層であり、時間軸に沿って一方向に進行する。

(ソウダナ) → 荷物ハ タブン キノウ 横浜ニ ツイタダロウ → (ヨ) + Δ類

表語行為とはこうした音声操作の用意として発声の寸前に実行される思考操作に基づいて、思考の内部に提示された語形を一方向の音列に変換して発音を続けて行く音声操作の遂行である。従ってΔ類という階層は言語の過程に見られる音声操作というプロセスの一段階である。思考操作のうち Mental processing に当たるのはA類とB類の語句を素材として語列を形成する操作の部分である。この思考操作は日常の時間感覚に照らせば一瞬の出来事であり、瞬時に完了する。これに対してC類の語句の提示は語列の成立した時点から語列を音列に変換するのに必要な時間だけ持続することとなる。時間軸を縦軸に取れば次の様に図示されることになる。横向きの矢印

5 こうした双方向への動きは実際に脳内の神経回路における生体電流の流れが双方向的ないしは多方向的であるために生じるものと推量される。

文の階層構造と発話行為

→ は時間の推移を具象する符号である。

【思考】 荷物ハ タブン キノウ 横浜ニ ツイタダロウ

【発音】

(ソウダナ)

→ 荷物ハ

→ タブン

→ キノウ

→ 横浜ニ

→ ツイタダロウ

→ (ヨ)

これに対して下に向かう矢印 ↓ は思考の内容である語形を話し手が自らそれと確認するプロセスを示す。Mental confirmation ないし Mental Recognition のプロセスと呼んで置こう。確認のプロセスは一瞬の出来事ではなくて暫くの間は続く出来事である。この持続する時間の内に発話に対する話し手の態度表明が確定的な形で示されることになるわけである。発話に対する話し手自身の態度表明はこうした暫くの時間の経緯の内に実行されることがここから明らかになる。

真性モダリティを示す形式である命令文の例を別に挙げておく。

【思考】 早く コチラヘ 来イ

【発音】

早

ク

コ

チ

ラ

ヘ

↓

↓

↓

↓

↓

↓

来
イ

真性モダリティは話し手が話の時点において、話し手の心の中に浮かんだ語形に対して抱く心的な態度そのものであるから、過去になることはないし、話し手以外の心の動きには及ぶこともない。更に話し手は語形に対して現に心的な態度を取っているのであるから、非存在となることも有り得ないわけである。

次は決意表明の例文である。

【思考】 直グニ 行コウ

【発音】(ヨ

シ)	↓
直	↓
グ	↓
ニ	↓
	行 ↓
	コ
	ウ

こうして見れば、言い切りと呼ばれる文末処理の操作には次の如き思考操作が伴うことが判明する。すなわち言い切りには、話し手が自らの心の中にいて話し手自身に対して提示した語句の形を最終的に確定するという操作が伴うのである。次の例文を見よう。

- (a) 直グニ 行コウ + a
- (b) 直グニ 行コウ。
- (c) 直グニ 行コウ／カ／ヨ／ネ。

(b) の例文では、(a) の例文に付着する + *a* の部分が言い切りにより最後の断念されて、ようやく話し手が自らの心の中において話し手自身に対して提示した語形が決意の表出であることが確定し、そう確認される。これに対して、(c) の例文に見る通り、言い切りとはせずにカネヨが後続すると、話し手が自らの心の中において話し手自身に対して提示した語形は聞き手の意向についての打診であったり、聞き手に対する共同行動への誘いかけとなったりする。要するに言い切りはカネヨの如き伝達のムードを担う終助詞を伴わないいわばゼロ形式の伝達のムードを伝える語形なのである。

自己準拠は自己言及とも自己参照とも言う。話し手が話し手自身に言及する言い方のことである。自己準拠に応じて、伝達のムードは除いて、モダリティに二種類の区別が発生する。

モダリティの二種類。命題内容に対する話し手の態度 (M1) に加え、話し手自身に対する話し手の態度 (M2) もモダリティに含まれる。

Prop + M (M1 + M2)

M2は話し手が本人に言及する自己準拠のモダリティである⁶。

言葉を変えて言えば、提示された事態に対する話し手の心的な態度を示す

6 仁田1991の指摘する人称制限に解析を加えてみよう。話し手は個人というシステムである。聞き手は話し手の外部である環境の中に出現する別の個人というシステムである。人称の非対称性はここから発生する。個人というシステムにとってその内部と外部の識別は根本的であり、個人というシステムが存続する限りその差異は消失することがないからである。

ところで聞き手にとっても話し手はその外部に出現する聞き手とは別の個人というシステムである。この点で話し手と聞き手は交互にその位置を交換するそれぞれ独立の個人というシステムであるということになる。自称と対称の対称性はここから発生する。互いに自分の外部に出現する個人というシステムであるところは共通であるからである

語句が M1 であり、提示された語形に対する話し手の心的な態度を示す語句が M2 である。

命題内容に対応する事態の成立を話し手がどう認定するか。これが M1 のモダリティである。命題内容が言及する対象である事態の成立を話し手がどう認定するかと言い換えてもよい。

これに対して M2 のモダリティは命題態度をも含む命題の全体に対する話し手の態度を表すものであり、自己言及、自己参照、自己準拠の形式を取る⁷。

山田孝雄のいう「統覚作用」とは取り分けて C の 2 類のモダリティ形式のことである。命題内容と命題態度からなる命題という全体に対して話し手がとる態度のことである。

C の 1 類は事態の定立に関する語句からなる。認識のモダリティはこちらに含まれる。真偽値の判定は C の 1 類に属する。

まず基本的な命題と明示的な命題ないしは潜在的な命題と顕在的な命題の関連に目を向けて置こう。

雨が降ッテイル。

本当ニ雨が降ッテイル。

雨が降ッテイルノハ本当ダ。

雨が降ッテイルトイウコトハ真デアル。

真偽値の判定は普通断定と呼ばれる言い切りの語句に示される。

「シャツハ買ワナカッタノネ？」

7 野田1989にいう「真性モダリティを持たない文」は、主題の「～は」を含まないといった特性を持つ(140頁)。またその機能として「主張をもたない」(141頁)ことがまず掲げられている。この事実は、真性モダリティと主題のハが同一の階層に位置するC類の語句であり、またこうした語句に伴う特性であることを裏側から示すものであると言えよう。

シャツヲ買ワナカッタトイウコトハ真デアルノカ？

「シャツハ買ワナカッタ」(断定形)

シャツヲ買ワナカッタトイウコトハ真デアル (真偽の判定)

Cの2類は判断の定立に関する語句からなる。判断の成立に対する話し手の認定を示す語句である。自己提示はこちらに含まれる。

例えばハイ/イイエという返答はCの2類に属する。173頁

「ハイ買イマセンデシタ」

シャツヲ買ワナカッタトイウコトハ真デアルトイウ判定ハ受ケ入レル

「イイエ買イマシタ」

シャツヲ買ワナカッタトイウコトハ真デアルトイウ判定ハ拒ム/受ケ入レナイ

話し手がまず行う真偽判定を聞き手も模倣した上で、真偽判定の結果に対して次の話し手である前の聞き手は受諾ないし拒絶の態度を表明する。真偽判定の模倣は命題内容に対する聞き手の態度の現れであるのに対して、こうした自らの態度表明に対してもとの聞き手である新しい話し手が示す受諾や拒絶の態度は真偽判定という自らの態度表明に対する更なる態度表明であり、自己言及的なモダリティの典型である。肯定命題に対してYes/Noを発する欧米語のYes/Noが M1 段階のモダリティを示す語句であるのに対して、全体命題への拒諾を示す語句である日本語のハイ/イイエは M2 段階のモダリティを示す語句である。

柔らげのモ。ある出来事が事実としての資格を有しているかどうかという点について話し手が実行した審査の結果に対する話し手の態度の表明である。春もたけなわ。

宴モタケナワデスガ、夜モ更ケテ参リマシタノデ、コノ辺デオ開キニ致シ

マス。(発話条件の確認)

夏モ近ヅク八十八夜、野ニモ山ニモ若葉ガ茂ル、(情景描写)

草木モ眠ル正三ツ時、(場面設定)

日本語はCの2類に属する語句が発達した言語なのである⁸。

8 益岡1991は日本語のこの側面に着目して文法論の一新を目指す意欲作である。

益岡1991は命題成分に含まれない文の成分を一括してモダリティと呼び、モダリティの全体像を解明するという思い切った試みに取り組んだ力作であり、今後の日本語のモダリティ研究を先導するに違いない先駆的な作品である。

尤も益岡1991はモダリティという概念を一方では話し手が話の現時点で示す心的な態度を表す語句の意味にも用いている。他方では命題成分には含まれない語句の意味にも用いるという風に多義的に用いているため、益岡1991の分析は包括的というよりは網羅的であるし、体系的というよりは羅列的であり、また明示的というよりは対照的な説明に帰着している。これは益岡1991がモダリティという概念を定める際に英米語の助動詞の用法をパラダイムとして利用したために発生した避けがたい傾きである。もともと英米語の様相の助動詞のうち真偽判断に係わる認識モダリティを表す助動詞が有する特質にはこの画面が分かち難く含まれているからである。

益岡1987では命題成分について明白に命題成分である範囲に限っているため、モダリティについては明白にモダリティ成分である寺村1981にいう「陳述の助動詞」やそれに後続する終助詞ばかりでなくて、明白に命題成分である範囲には含めにくいものの明白にモダリティ成分ともいいにくい「取り立てのモダリティ」や「認め方のモダリティ」や「テンスのモダリティ」や「価値判断のモダリティ」もまたモダリティ成分の一部に取り込まれることとなる。

中でも一番内側に位置する「取り立てのモダリティ」の分析にはこうした手法の無理が集中してしまっているかの如くである。取り立ては複数の命題の間に見られる「対立」という命題成分には含まれないあるものを指し示すという説明が行われているが、疑問である。

私見によれば、取り立てとは複数の命題から一つを取り出して述べて、そこに含まれる要素に焦点を当てながら、他の命題を含みとして残す語法であり、複数の命題の外に「対立」といったものは認められない筈であるからである。例えば「花子も来た」という例文では「花子が来た」という命題と「花子とは違う者が何人か来た」という別の命題を並べて、その中から「花子が来た」という命題を取り立てて、更に花子に焦点を当てることが行われているが、ふたつの命題は別の出来事を述べ立てる別々の命題であるだけで、その間に命題成分に還元されない「対立」なぞは見当たらないからである。

明白な命題成分と明白なモダリティ成分の間に位置する語法に分析の光りをあてた益岡1991の功績は大きい、その全体にモダリティという名称を張り付けることには賛成しがたい。

英米語が自然言語であるとすれば、日本語は人間言語である。英米語は自然の世界を描写するのに向いているのに対して、日本語は人間の世界を描写するのに向いた言語であるからである。

ハイ/イエがΔ類ではなくてC類であることを示す材料を挙げて置く。

君たちハソコへ行キマシタカ？

イエ私ハ行キマセンデシタケレド、近藤サンハ行ッタヨウデス

イエがケレドという従属句に含まれる例文である。174頁

含まれないとすると「イエ……近藤サンハ行ッタヨウデス」と繋がってしまう。

認識のモダリティはCの1類に含まれる。これに対して義務のモダリティはCの2類に含まれる。例えば規範を示すモダリティは状況判断の一要素であるから、こちらに含まれる。自分を含む多くの人々がそう思っているといった状況判断では、自分もそう思っているという面が含まれてしまう⁹。

益岡1991は主観と客観を二分的に対立させる意識の哲学というやや古い思考の枠組みに従う作品である。こうした古い思考の枠組みに立つ益岡1991の達成を引き継ぎながら、それを社会システム論という新しい思考の枠組みに依拠して整理し直すことが今後の課題である模模である。

因に益岡1991が価値判断のモダリティとして挙げるコトダやモノダは、私見によれば挙証性を示す語形であって当為的要請を示す語形ではない。当為命題ないし規範命題の意味については蓮沼啓介「規範と発話行為」を参照されたい。

- 9 中右1994にいう真偽判断のモダリティと価値判断のモダリティは認識のモダリティに属するのに対して、判断留保のモダリティは本稿にいう判断のモダリティに属する語句である。是非判断のモダリティは判断のモダリティと発話行為の局面に跨がる語句である。なお拘束判断のモダリティについては発話行為の生成に寄与する種類に属する語句であり、提示のムードではなくて伝達ムードの事例として分類すべきであろう。

中右1994は心的動詞節と遂行発話節の平行関係を鋭利に分析するが、次の例文において遂行発話節に用いられているのは発話動詞であって遂行動詞ではない事には注意が必要である。(94頁)

主題のハ。春ハアケボノ (イトヲカシ)。C類に属するものの中間の形式である¹⁰。係助詞。係り結びという作用は「統覚作用」を示す。うち主題の

(18) a. Briefly, I promise you to finish my work today.

c. Precisely, I order you to get out of here.

(18) a の promise は既に実行された発話行為や現に実行されている最中の発話行為を描写したり叙述したりする発話動詞であり、遂行的な発言に用いられる遂行動詞ではない。この例では現に実行されている最中の発話行為を要約する形で描写し叙述する発話動詞である。また (18) b の Precisely は I (neither advise nor request but) order のうち省略されている部分に用いられている筈の advise や request ではないことを限定的に修飾しているのであって、order という動詞は遂行動詞であるが、Precisely という副詞とは独立に発話行為を遂行しているわけである。

従って、心的動詞節と発話動詞節とに平行関係が認められるといっても、遂行動詞節との平行関係は確認されてはいない。発話行為を描写する発話行為節と心的動詞節の間に平行関係が認められたとしても、それだけの事実では遂行動詞を用いて実行される発話行為が伝達段階において実行されることを否定する根拠としては不十分である。「遂行発話節はモダリティの直接的表現形式である」(84頁) という通説に叛旗をひるがえす主張は遂行動詞節には当てはまらず、精々のところ発話動詞節の範囲でしか成立しないことになるのほかはない。

- 10 野田1995「文の階層構造からみた主題ととりたて」は対比のハや同類のモがB類という階層に位置するのに対して、主題のハはC類という階層に位置し、柔らげのモは D類という (ないしは聞き手にたいするムードの) 階層に位置することを明らかにする。

尤も、柔らげのモについては、「質問や命令を表すムードの述語とは呼応しない」ことを理由に「聞き手にたいするムードの階層」に位置する (23頁) とするが、疑問である。なぜならば、柔らげのモは出来事が事実としての資格要件を有するかどうかを話し手が審査した結果を示す語句であり、それゆえ、柔らげのモは真偽が既に確定している事態を示すことになり、真偽不明の事態を問う質問や真偽未定の事態を要請する命令のムードとは呼応しないという限定が生じるのであるから、こうした限定が認められるからといって、柔らげのモが「事態へのムードの階層」には位置しないという判定はなりたたないからである。事態が実世界に所属する事実であると認定することは聞き手に対する配慮とは無縁かつ独立であり、事態に対するムードそのものにほかならない筈である。

柔らげのモないしは詠嘆のモについては、2003年にご本人より直接に受け取った澤田美恵子氏の草稿に見える知見に基づき、筆者なりの説明を加味したものである。

この点で尾上圭介「文核と結文の枠」にいう結合指示は先駆的な分析である。

尾上の卓見は、その言う「結文の枠」のうち係りの「ハ」と「モ」に《結合指示》という機能を担う特別の場所を指定した所にある。

実は尾上はここで「結文の枠」という語を多義的に使っているわけである。《打ち出し》や《判定》にかかる「結文の枠」は、実は文の素材内容のなかでも話しの現場における話し手の内面が具体的な態度として表明された箇所であって、これに対して尾上のいう「文核」は話し手の内面から一応独立にその外部に存立する事態を素材として言葉に表がした箇所である。事態の自体的表示から話し手による事態へのあからさまな態度表明までは連続的であり、それ故その間の移行は連鎖的であり、次元や層の区別はあくまでも仮の区別に留まるわけである。

これとは対照的に、《結合指示》にかかる「結文の枠」の方は、文構成に参加するレベルを異にする別の事象である。「ハ」が割って入ることにより、現象とそれを描写する文との間に隙間が生じ、文は現象に直面することになる。係りと結びの合成力により、文は現象から引き離されて命題として取り立てられることになるわけである。

尾上は次の様に語っている。

《雪ハ白イ》という語列は、「ハ」という助詞の拒斥という意味の個性と、文末ならぬ文中係助詞として一句の最大の切れ目にはいるというこの助詞の形態位置的機能とによって、「雪が白い」ことを拒斥的に確認した形、あるいは拒斥ということがカオス一般からの特立に過ぎない場合には当該事態専一に「雪が^ハ白い」ことを確認した形であって（云々）。（尾上2001、90頁）。

ここで田辺元がデデキント的な切断を生涯にわたって語り続けたことを思い起こしても良いであろう。田辺はいう。「切断……が、張った糸の如き連続体を切ることによって繋ぎ、切口を入れてしかもそれを再構成するものであるならば、その切口を入れるナイフは、全く厚さのない絶対に鋭利なる刃をもつものでなければならぬであろう。然らざれば、切口は必ず隙間を作って連続を傷つけ、従って連続体を再構成することはできなくならざるを得ない」(12/216-7)。日本の哲学、第8号(2007)、100頁参照。

「ハ」は「コト」を切り分ける鋭利な刃であり、木の葉の様に薄く、しかも歯の様に鋭く糸を食いちぎりながら、食いちぎった糸を再び繋ぎ留めるものなのである。「雪が白い」という事態を「雪」と「白い」という二つの切片に切断し、更に切片を再び結合して「雪は白い」という命題を生成して意味の連続を回復する。こうした操作は瞬時に行われる。「厚さのない絶対に鋭利なる刃」とは人間の持つ判断能力に備わる「反射力」のことであり、その先鋭な比喩である。直線ばかりでなく時間もまた連続体であるから、瞬間とは切断と連続の結合であるのほかはないということである。

別の言葉で言えば、「ハ」や「モ」は付着した語を主位として取り立て、更に属位の後続を予告する機能を担う語形であるということになる。ここで主位は Subject、属位は predicate の訳語である。つまり「ハ」や「モ」は論理学にいう結合子 copula である。結合子は主位と属位の媒介であるから、主位と属位の仲介

ハはC類の特質を代表し、柔げのモともいう詠嘆のモはCの2類の特質を代表する語句である。言い換えれば主題のハは提示のムードの代表であり、詠嘆のモは判断モダリティの代表ということになる¹¹。

役として、主位と属位の中に位置することが普通であるし、自然でもある。

日本語の結合子である「ハ」や「モ」の特質は、実世界に所属する要素をまず取り立てるところに認められるわけである。実世界とは別のところに真実の世界が例えばイデアの世界とか夢や神話の世界などが広がっているとする古代人の精神世界と比較すると、近代人にとっては五つの感覚で知覚できる実世界が唯一の現実なのであり、非事実の世界は信念の世界の内部に止まらざるを得ない。係り結びの消失を惜しむ尾上2001の志は高く潔い、つまり高踏的であるが、係りはあっても結びなしという「ハ」や「モ」に備わる関係構成力、尾上のいう「断続関係表示」の活力にこそ、新たな発話環境の只中において現代日本語が「伝達の言語」として更なる発展軌道に乗るために必要な飛躍台が用意されているということなのではあるまいか。言い換えれば「表現成立の現場性」を「忘却」から回復する梶子がそこに潜んでいるのであり、とすれば「現代語の文法的なあり方」を日本語文法史の「なれの果て」と理解するばかりでなくて、新たな生成への出発地点を画するその潜勢力に即して係助詞や終助詞の解析を進めることもまた文法家の果たすべき任務なのではあるまいか。

梅垣は叔葉より香ばし。「文核と結文の杓」において若き尾上が示した圧倒的な分析の冴えと切れ味を再び見せてほしいと望むのは無理な注文であろうか。

11 ダロウをめぐる安達＝宮崎論争について一言。

宮崎の分析の特質は判断の成立するプロセスを解析するところにあり、Cの2類の分析に適した枠組みである。但し、自己準拠の側面を見落としているため、不確かな事態に関する判断に確信が伴うという事情の説明に窮している。認識や判断の成立に際しては、認識や判断に含まれるモダリティ成分に関する話し手の態度も又モダリティ成分の一部をなすという循環的な形式が立ち表れるのであり、それ故、認識や判断としては完成していると認定する話し手の態度も十分に成り立ちうるわけである。

ダロウをめぐる安達＝宮崎論争の不毛性について。なぜ論争は不毛なのか。C類にCの1類とCの2類の下位区分のあることに気づいていない。安達にはCの2類が全く見えていない。一方、宮崎には次の点がかかっていない。すなわち安達にはCの2類の完全な見落としがあることに論争が不毛となる真の原因があることがある。Cの1類の範囲では命題の成立と命題の言及する事態の成立とを切り離して論じる必要は生じない。その結果、事態の成立とは切り離された形による命題や判断の成立するプロセスを解析するという問題領域そのものが成立しないこととなる。

安達＝宮崎論争の論点については蓮沼昭子2004のうち「問題の所在」の箇所を参照されたい。「のではないか」を材料に安達と宮崎が説明に用いる概念装置に見

仁田1991の分類を試みに再構成して見よう。こうすると話し手が心の中に提示した語形を介して発話の種類を確認している有り様が浮かび上がって来る。これらはどれも提示の段階に出現する語句である。それ故、C類に属す判断のモダリティの一種であると位置づけることができる。

働きかけのモダリティ

コッチニ来／イ	(指図)
一緒ニ食べ／マショウ	(誘いかけ)

表出のモダリティ

今年コソ頑張ロ／ウ	(意志)
水ガ飲ミタイ	(希望)
早ク天気ニナアレ	(願望)

問いかけのモダリティ

彼／女ハ本当ニ大学生デスカ	(問いかけ)
---------------	--------

述べ立てのモダリティ

多分明日ハ晴レルダロウ	(予感)
オソラク雨ハ降ルマイ	(直感による予測)

もともと仁田1991の分析枠組みは(82)の如き命令文を真性モダリティを示す形式の基本形と見定めるものである。(53頁。例文の番号は仁田のままである)

- (82) 早クコチラへ来イ。
- (83) ヨシ、スグニ行コウ。
- (84) タブン明日ハ晴レルダロウ。

逃せない違いがあることが簡潔に確認されている。更に表1と表2における「だろう」の欄に割目しつつ、「だろう」に関して二人の用いる説明の装置に見られる違いを点検されたい。

(85) オソラク雨ハ降ルマイ。

その上で、命令形が階層構造において独立句からなるD類に属することは南1974に明らかであるから、命令文の示すモダリティが発話・伝達の段階に現れるモダリティであると分析を進めている。

だがここには分岐点が潜んでいた。このことは見逃せない。(84) や (85) のごとき推量文から出発すれば、分析の進路は異なった方向に向かったに違いないからである。

(84a) タブン明日ハ晴レルダロウカラ、遠足ハ楽シイゾ。

(85a) オソラク雨ハ降ルマイガ、念ノタメニ傘ヲモッテ行コウ。

推量形が階層構造においてC類に属することは南1974からも明白であり、この場合には推量文の示すモダリティは南1974のいう提示の段階に現れるモダリティであると分析されることになったとしか考えられないであろう。

(1) 明日ハ雨ニナルダロウガ、遠足ハ行ワレルダロウ。

(2) *明日ハ雨ニナルダロウねガ、遠足ハ行ワレルダロウ。

真性モダリティを示す形式が基本的には提示の段階に出現する語形であるとするれば、命令文は真性モダリティを示す形式としては派生形であり例外であるということになる¹²。発話・伝達の段階の語形の中から思考の段階の語

12 命令形がD類の語句に発達したのは、禁止や制止を示す終助詞のナは典型的なD類の語句であり、それに右にならえをした結果であろうと推定される。

マタソナナコトスルネ。(傍観)

マタソナナコトスルノ。(冷笑)

マタソナナコトスルナ。(制止)

二度トソナナコトスルナ。(禁止)

現代語の命令形がD類になった経緯について。いづら猫は、こちみて来。来イの

形を取り出して見ればどうか。

コッチニ来イト言オウカナ。(指図へのためらい)

一緒ニ食ベマショウトイウ誘イノ言葉ガ口カラ出ソウダ。(誘いへの高まり)

早ク天気ニナアレト心ノ中デ眩イテイマス。(秘められた願望)

彼ノ女ハ本当ニ大学生カ(ガ)、気ニナッテ仕方ガナイ。(疑問の滞留)

頑張ろうガ頑張ルマイガ、ドノミチ大差ハナイ。(意志の空しさ)

思考の段階の語形は引用節には入るし、ガ従属節にも入ることがある。こうして見ると命令形や真性モダリティ形式を備えた文が従属節に入らない独立句であるのは、音列の段階において見られる現象であり、思考の段階での特質ではない事が判明する。

要するに、(82)や(83)の例文に見られる独立句は伝達段階の語句であるが、提示段階の語句をも兼務しているということである¹³。別の言葉で言えば、独立句には提示段階の語句が包み込まれているということである。仁田1991の挙げる例文ではやや分かりにくいのであるが、次の例文を見れば、事態は明白となる。

(82a) 早ク食べ／ロ

(83a) ヨシ、直グニ論文ヲ書キ上ゲ／ヨウ

占形はコである。コ+ヨ→来イ。伝達を担う終助詞のヨが形態素に取り込まれてしまった。

セ+ヨ→セイ。起キヨ→起キロなども同様の発展である。この変化は終助詞が形態素に変形した文法化の一例である。

13 主題を表すハが格助詞を兼務するという発見が三上章の独創であり、三上文法の核心に位置する知見であることは、今では余りにも有名である。

(82a) の例文のうち「早く食べ」の部分が南1974にいうB類に属する語句であることは次に掲げる (82b) や (82c) の例文からも明らかである。

(82b) 早くオ食べ。

(82c) 早く食べテ、学校へ行キナサイ。

同様に (83a) の例文のうち「直グニ論文ヲ書キ上ゲ」の部分が南1974にいうB類に属する語句であることもまた次に掲げる (83b) や (83c) の例文からも明らかである。

(83b) マズ論文ヲ書キ上ゲ、次ニ学会誌ニ投稿スル。(大学教師になる方法=マニュアル)

(83c) ヨシ、直グニ論文ヲ書キ上ゲ、直チニ投稿シヨウ。

仁田1991の挙げる例文に戻れば、こうなる。

(82) 早くコチラヘ来イ。

(83) ヨシ、スグニ行コウ。

(82) の例文では「早くコチラヘ来 (=k)」の部分が南1974にいうB類に属する語句に当たることになるし、また (83) の例文では「スグニ行 (=ik)」の部分が南1974にいうB類に属する語句に当たることになるわけである。

とすれば、命令形には伝達段階の語形だけでなく、提示段階の語形も含まれているという見方が成り立ちそうである。なぜならば、B類の語句とD類の語句である命令文の間には何もないという見方と、命令形はD類の語形であるばかりでなくて同時にC類の語形でもあるという見方とでは、後の見方の方が自然である様に思われるからである。

真性モダリティ形式は命令文に備わる特性ではなくて命令文に包み込まれた命令形の語形の部分に備わる特性であるかも知れないということである。

あるいはこう言うこともできる。命令形という語形は提示段階と伝達段階の双方において同形であり、伝達段階の語形から提示段階の語形を分離することができない。そのために～カラ従属節に入るといった提示段階に独自の用例は認められないこととなり、真性モダリティ形式は提示段階の語形に備わる特性であることが見失われ勝ちであった、と。

別の言葉で次の様にも言えよう。すなわち普通は伝達の段階で用いられる語形が、提示段階の意味を担う語形に特化することがあるということである。

例文の(82c)の一部である「コチラへ来イ」の箇所は提示段階の意味を担う語形に特化していると解することができるのではないか。

(82d) コチラへ来イ。

(82e) コチラへ来イヨ。

また例文の(83d)や(83f)の一部である「スグニ行コウ」の部分もまた提示段階の意味を担う語形に特化していると解することができるのではあるまいか。

(83d) スグニ行コウカ、ドウシヨウカ。(自問)

(83e) スグニ行コウ。

(83f) スグニ行コウ／ヨ／ナ／ゼ。

ここで表語行為とは話し手が自らの心の中に自分に対して一定の語形を提示する行為であるとすれば、命令形という語形を提示することは表語行為そのものであり、こうした表語行為に従い提示された語形に沿った発声の実行される伝達段階において、聞き手の側からする表語行為の認識が始めて成立することになるわけである。

かくて仁田1991の試みは次の様に再び分類されることになる筈である。これは提示のムードの下位分類である。うち認識のモダリティをCの1類と

呼び、判断のモダリティをCの2類と呼び、働きかけ、表出及び問いかけのムードをCの3類ないしはCの0類と分類するのが分かりやすいかも知れない。

働きかけのムード

命令

誘いかけ

表出（ないし言い出し）のムード

意志

希望

願望

問いかけのムード

事態の問い

情意の問い

述べ立てのムード

認識のモダリティ

判断のモダリティ

更に認識のモダリティを次の様に下位区分することができそうである。

真偽判断のモダリティ（中右1994）

見込み

様態

伝聞

価値判断のモダリティ（中右1994）

その上で判断のモダリティを次の様に下位区分することができそうであ

る¹⁴。

判断停止のモダリティ

猫カ？（疑念）

何ダオ前カ（発見）。

アイツデモ名誉教授ニナレタカ（感嘆）。

判断継続のモダリティ

平叙文（挿入形）

判断保留のモダリティ（中右1994）

ダロウ／デショウ／カ、カ

是非判断のモダリティ（中右1994）

ヲ疑問ニ思ウ、疑ワシク思ウ、ドウカト思ウ、私ハ認メナイ

判断確定のモダリティ

平叙文（断定形）・現象文・現象描写文・状況描写文など

山田ジャナイカ！（確認）

イクラ考エテモ結論ハ変リマセンネ（熟慮）

判断提出のモダリティ¹⁵

14 認識のモダリティと判断のモダリティだけをモダリティと呼び、あとは提示のムードとか伝達のムードと呼ぶ方がわかりやすい。働きかけのムードとか表出のムードとかのべたてのムードとか問いかけのムードとか呼ぶわけである。但し真性モダリティと疑似モダリティや一次的なモダリティと二次的なモダリティの区別は大事であり、これらはこれまで通りモダリティと呼ぶ方が良さそうである。

なお中右1994にいう判断保留のモダリティに並べる以下の語形は認識モダリティの下位区分である伝聞に分類する方が適切であろう（59頁）。

トイウ、トイワレル、トサレル、ト聞ク、ト聞イテイル、ソウダ

聞クトコロニヨレバ、ウワサデハ

15 判断という操作は実世界を始めとする一定の世界からそこに所属する要素を取り

主題のハ

詠嘆のモ (柔らげのモ)

判断補強のモダリティ

説明のムード (寺村 1981)

判断審査のモダリティ

奇妙ナ話ダガ、不思議ナ話デスガ、

話し手の発言が事実の確認なのか推断的な判断なのか意見の主張なのかは、話し手が自らの立場をどう認定するかによって定まる区別である¹⁶。

ともあれ A 類、B 類、C 類の語句は Locution 表語行為の成立に寄与する語句である。この点で Illocution 表語内行為の成立に寄与する Δ 類の語句とは大きく異なっているわけである¹⁷。

D 類 従属句に入らない語句である。

A 類や B 類や C 類とは違った基準で分類が行われている。従って、A 類や B 類や C 類と並列するのではなくて、異なった種類の記号を使うことが望ましい。従ってむしろ Δ 類と呼ぶ方がいい。Δ はデルタである。Δ 類の語句は Locution 表語行為ばかりではなくて Illocution 表語内行為の成立にも寄与

立てて、その状態や属性を言葉に表現する思考の操作である。

例えば「ペガサスは羽の生えた馬である」という判断はギリシャ神話の世界から羽の生えた馬を取り立てて、その属性である羽が生えていることを述べ立てる操作であるし、「象は鼻が長い」という判断は実世界から象を取り立てて、鼻が長いという属性を述べ立てる操作である。また「春もたけなわ」という判断は実世界における実体験を土台に今年の春を新たに実世界に加わった新事実として取り立て、今年の春もようやく盛りに至ったということを述べ立てる操作である。

16 宮崎ほか 2002、128～133 頁参照

17 表語行為と表語内行為の差異と関連については蓮沼啓介 2007a を参照されたい。

する語句である。

Δ類として南の挙げる例文は次の四種類に下位分類される。Δの1類。思考や感情の表出を担う語句である。Δの2類。伝達意図の表出を担う語句である。Δの3類。発話の表出と伝達を担う語句である。Δの4類。発話の相互承接の表出を担う語句である。更に、南は例を挙げてはいないが、Δの5類がある。文章表現のジャンルを示し目的を語る語句である。

山田孝雄のいう「陳述」を担うのはΔ類に含まれる語句である。陳述とは陳べ述することである。言い換えれば開陳し叙述することである。開陳とは思考を表出する操作のことであるし、叙述とは叙景を伝述する操作のことである。思考の表出と伝達に当たる概念である。林四郎のいう「表出段階」と「伝達段階」に対応する概念である。文の素材と話し手の態度を示す dictum と modus という用語を用いれば、modus の世界にはC類とΔ類が含まれることになるが、うちC類は「統覚作用」に当たり、Δ類が「陳述」に当たるとのことである。

Δの1類 思考や感情の表出。

話の現場に聞き手が不在の場合に普通用いられる。思考や感情は多くは言葉を用いて展開されるが、音声は伴わない黙読ならぬ黙声の形で進められることも多い¹⁸。伝達意図が欠落しているところにΔの1類に所属する語句の特質が認められる¹⁹。

18 尤も言葉を伴わない思考や感情もある。

19 伝達意図については Grice 1957 及び Kuroda 1989 を参照されたい。伝達意図は聞き手にそれと確認されるだけで意図そのものが実現するという通常人々の抱く意図とは異なる摩訶不思議な特性を有しているわけである。伝達意図と伝達内容の双方が聞き手に確認されると伝達という行為は完全を実現する。発話において話し手は伝達意図と表語行為の双方を聞き手に確認して貰おうと聞き手に働きかけるわけである。

独り言。 ウン コリャ ウマイ 176頁
キョウモ雨カ
コレ ドウシタラ イイノカシラン
サア 行コウカナ
イヤン ナッチャウナ
シメタ
ヤアメタ (ヤアメタット)

喚休句 マア キレイナ 空! 106頁
アア ロクサアヌ!
チクショウ!
ウーン オミゴト!

問投詞の類い

アー、エエ、ウン、オウ、ハイ、ハー、ハッ、ヘイ… 227頁
ウーン、エー、

事物や不在の話し手に向けた発言の場合。

雪ヨ! 岩ヨ! 我ラガ 宿リ 俺タチャ 街ニハ 住メナ
イカラニ (放歌高吟)
青年ヨ、大志ヲ抱ケ! (演説の予行演習)
万国ノ労働者ヨ、団結セヨ! (パンフレットの下書き)
ト思ウノト言イタイ (草稿の執筆)

話の現場に聞き手が実在する場合にそれに気づきながらそれとなくひとりごとめいたことを言う場合には伝達意図を隠しているのであり、伝達意図が欠落した発話には当たらない。

文の階層構造と発話行為

ダレカオ妾サンニナツテクレナイカナ。(人中でのさりげない発言)
コレカラテレビデモ見ヨウカナ。(希望の公表)

音量が聞き手に伝わるのに十分なほどの場合には、伝達意図が含まれているのが普通であり、△の2類に移行する。

△の2類 伝達意図の表出。

呼びかけ

オーイ 三郎君! 106頁
伊藤サン! 152頁
ケンチャン (アソボウ)
オネエチャンタラ
オトウサンッテバ

掛け声。ソレ行ケ 177頁
ヨイショ
セイノ
ハイヨ 106頁
ヤッコラサ

応答詞 イイエ、イヤ、ンンン、 227頁
オイ、オイオイ、コラ、コラコラ..
アノー、(モシモシ)

終助詞 サアトブゾ 179頁
私カエルワ
(ソライクゼ)

ネ、ネー、サ、ヨ、ヨ一、カ

問投助詞 ナ、ナア、ネ、ネエ、ヨ、サ

終助詞のナ、ネ、ヨ、サが冠頭に来て伝達意図の表出に機能を特化した形態である。ナからナアが派生する。ネからネエが派生する。伝達意図が強調される。

△の3類 発話の表出と伝達。

発話行為それも表語内行為の成立に直接に寄与する語句である。表語内行為の生成を促し進める Trigger つまり引き金となる語句や語調である。多くは基本的な行為遂行的な発言である。顕在形に変形することができる。

ホラ、水タマリ！ 152頁 (=ホラ水タマリガアルゾ)
蜂！ (=蜂が来タ)

八ページカラ 十六ページマデ カナラズ 読ンデクルコト (=読ンデコイ)
水！ (水ヲ持ッテコイ)
コッチ、コッチ！ (=コッチヘコイ、コッチニ置ケなど)

ビールダ！ (=ビールヲ持ッテコイ)
コッチダ！ (=コッチニ置ケなど)

オイ ネエチャン、酒！
キャッチャー、ボール！ (=キャッチャー、ボールヲ返セなど)

コレヲ アナタニ 差上ゲマス 175頁
ソレデハ エンリヨナク チョウダイイタシマス

文の階層構造と発話行為

ヨシ子チャンガ オ姉サンデ、エリ子チャンガ 妹ナノヨ
フウン、ジャ フタリハ キョウダイナンダネ
加藤サン ソノヘンデ 食事シマショウ
エエ デモ 私 キョウハ チョット イソクノデ 失礼シタインデスガ
サア飲メヨ
ソノ新聞持ッテキテ (持ッテキテチョウダイ)
コンドハ失敗スルナヨ
ソナナ コト シタラ ダメ

基本形から顕在形への変形を試みよう。

ホラ、水タマリ！ (＝ホラ水タマリガアルゾ)
ホラ、水タマリト言ッテ、水タマリニ 足を取ラレヌ様ニ 警告シマス。

八ページカラ 十六ページマデ カナラズ 読ンデクルコト (=読ンデ
コイ)
八ページカラ 十六ページマデ カナラズ 読ンデクルコトラ ココニ
要求スル。
コッチ、コッチ！ (=コッチヘコイ、コッチニ置ケなど)
コッチ、コッチトイッテ、コチラニ 誘導サセテ 頂キマス

ビールダ！ (=ビールヲ持ッテコイ)
ビールダト ドナッテ、ビールヲ 持ッテ 来ル様ニ 命ジマス

オイ ネエチャン、酒！
オイ ネエチャン、酒ト 大声ヲ アゲテ、酒ヲ 注文イタシマス

加藤サン ソノヘンデ 食事シマショウ

エエ デモ 私 キョウハ チョット イソクノデ 失礼シタインデスガ

加藤サン ソノヘンデ 食事シマショウト 申し上ゲテ、食事ニ オ
誘イシマス

エエ デモ 私 キョウハ チョット イソクノデ 失礼シタインデス
ガト 申し上ゲテ、 食事ヘノ オ誘イラ 断ラセテ 頂キマス

顕在形の行為遂行的な発言は、英米語の場合には一人称による話し手への言及と発話動詞の使用による遂行中の発話行為への言及という二重の自己準拠にその典型的な形式が示される。

自己提示が多重に実行されているということである。日本語の場合には謙譲形の使用により話し手への自己言及が行われることが多い。発話動詞の使用と補助動詞としての謙譲形の使用が二重の自己準拠を形成する。

△の4類 発話の相互承接の表出。

テキスト形成のモダリティ (中右1994) はおおむねこれに当たる²⁰。
その多くは文頭に来る接続詞である。

20 中右1994には次の語句が並べられている (59頁)。

- a. シカシ、シカシナガラ、トコロガ、マタ、タダ、タダシ、ダガ、ダカラ、カラトナレバ、ダトスルト、トスルト、ト、ノデ、
- b. ソノ一方、一方、ソノ半面、半面、トハイエ、ソウトハイエ、デアレバ、ソウデアレバ、ソレナノニ、ナノニ、ソレニシテモ、ニシテモ、ソウダトシテモ、ダトシテモ、ソウダケレドモ、ケレドモ、ソレユエ、ソレデモ、ソウイウワケデ、ソノ結果、ソノ矢先、ソノ瞬間、
- c. ハジメニ、最後ニ、第二ニ、ソノ三、マズ、次ニ、末筆ナガラ、トニカク、トリアエズ、サシアタリ、ツイデニ、ツイデニイエバ、チナミニ、結局

但し、カラやノデやトは先行する発話と一定の関係を示す機能はもたないので、テキスト形成のモダリティを示す語句からは外すべきである。尤も文末の接続助詞のカラだけは別である。またダケレドモを加えるほうが良い。

挿入句

本文の行う発話と挿入句の行う発話の関連を示す。普通は外の関係を文中において示す言い方である。

ナドトイッテの形 179頁

エリ子ちゃんハ ボクノ ガールフレンドダナンチャッテ

省略による余韻の発生。「ボク恥ズカシイ」「ボク照レチャウ」といった類いの結びの発話が省略されている。「ボク照レチャウ」という発話の結びの部分进行を言わずに隠す言い方であるから、普通でてれかくしと呼ばれる発話になる。

結びの発話を誘発する言い方である。

文末に付く接続助詞

私ハ コチラノ ホウデ イインデスケレド 179頁

タベテ ゴラン、ソリャウマインダカラ

文末の接続助詞であるカラは、「タベテゴラン」という勧めの発話と「ソリャウマインダ（カラ）」という理由説明の発話との関連つまり繋がり具合を示す語句である。

文末の接続助詞であるケレドは「私ハ コチラノ ホウデ イインデス（ケレド）」という選択結果を示す発話と「ソチラヲオ勸メニナルノデシタラ考エ直ス余地ハアリマス」という暗黙のままに置かれた遠慮の発話との関連を示す語句である²¹。

21 発話の繋がり具合を示す文末の接続助詞は発話の予告にあたる発言とは区別される。まず発話の予告を挙げて置く。

ココロヨリ 謝リマスノデ オ許シドサイ。本当ニ申シ訳アリマセンデシク。

(ココロヨリ 謝ルツモリデアルノデ オ許シドサイ)。

次は発話の繋がり具合を示す文末の接続助詞の例文である。

ドウカ オ許シドサイ、ココロヨリ 謝リマスカラ

文書による発話行為は文の続き具合を示すために相互承接を表出する必要がある。

頁数。文章番号 (論理哲学論考が有名)。

物語では句読点が文章の切れ目と続き具合を示す。文章は普通一列に順に並ぶ。

手紙や日記には日付がある。普通は時系列に沿ってその日の出来事が書き綴られる。

「正午三菱銀行に行き、昨日改造社より振出しの小切手を示せしに支拂証明書を要すべき趣に付、直に住友銀行芝口支店に赴き、証明書を受取り、再び三菱銀行に立戻り、ここに始めて預人をなしたり」(永井荷風 断腸亭日記 昭和二年六月二十二日)

Δの3類と4類に跨がる事例もある。

発話様態のモダリティ (中右1994) は直後に続く発話に先行して前書きや但し書きなどの留保条件を付すものであり、一方で発話の表出でありながら、他方では後続する発話との承接を示す語句であり、Δの3類と4類に跨がる語句である。

(ココロヨリ 謝リマスカラ ドウカ オ許シ下サイ)

(ココロヨリ 謝リマス。ダカラ ドウカ オ許シ下サイ)

「ココロヨリ 謝リマスカラ」に含まれた「ココロヨリ 謝リマス」の部分は提示段階の語形が例外的に使用された事例と解される。こうした発話を生成する表語行為に用いられる語形が伝達段階に用いられる語形と同一であり、伝達段階に用いられる語形から分離ができない様な場合には、通常は提示段階の語形をそのまま取り出すことは出来ないが、文末にカラが用いられる文型ではその取り出しが行われる。発話の予告は発話に先行するのが通例であり、それ故、後続するカラ節が先行する発話の予告には通常はなにくいからである。

文の階層構造と発話行為

率直ニ言ッテ、大雑把ニ言ッテ、マジメナ話、内緒ノ話ダガ、正直ナトコロ、

極論スレバ、包ミ隠サズ言エバ、アリテイニイッテ、手前味噌ダガ、自慢ジャナイガ、

Δの5類 文章表現のジャンルを示し目的を語る語句 南は例を挙げてはいない。

自己準拠性が顕在化する形式である。源氏物語の螢の巻が有名であるが、文学作品に登場する文学論には自己準拠性という循環的な特質が顕在する。ガ分裂文はもしかするとお話や物語というジャンルを指定する語句ではあるまいか。現象文の倒置による名詞句化である。

雑誌広告。車内広告。

政治的パンフレット。ビラの類い。発信者の名乗り方。

自由民主党の広報紙。公明党の機関紙。民主党のマニフェスト。

雑誌のタイトル

総合雑誌。世界

中央公論

婦人公論

専門雑誌。

国語学（表紙の表題）

国語国文

国家学会雑誌

神戸法学雑誌

法哲学 年報

報道番組

ニュース7（冒頭の字幕）

報道ステーション (冒頭の字幕)

学術書 三上 章『象は鼻が長い』
 南 不二男『現代日本語の構造』
 寺村 秀夫『日本語のシンタックスと意味』

学術論文「文の階層構造と発話行為」(本論文のタイトル)

△の3類4類5類に跨がる事例を挙げて置く。

謝辞 「謝辞」(澤田美恵子2007、191頁)

まず感謝の辞言い換えれば関係者に対して感謝の言葉を綴った文章である。
△の3類。次に本論と感謝の辞との相互承接を示す語句である。本論の完成
までに様々な形で支援を受けた皆さんに対して感謝の言葉を述べたことを説
明する語句である。△の4類。更に謝辞という文章のジャンルを示す語句で
もある。△の5類。

試みに伝達のムードの下位分類を提出して置く。

表出のムード	△の1類
独白のムード	
感嘆のムード	
呪詛のムード (罵りのムード)	
不在のムード	
伝達意図のムード	△の2類
呼びかけのムード	
掛け声のムード	

文の階層構造と発話行為

言いかけのモード	
念押しのモード	
発話のモード	Δの3類
見積もりのモード	
促しのモード	
引き受けのモード	
物言いのモード	
言挙げのモード ²²	
承接のモード	Δの4類
接続のモード	
挿入のモード	
順列のモード	
文別のモード（ジャンルのモード）	Δの5類
物語のモード	
記事のモード	
題名のモード	
	以上

22 言挙げのモードの細分類については趙沼啓介2007a、309頁から310頁にかけて掲げた日本語の和語動詞の範囲における言明解説型の遂行動詞の表を参照されたい。例えば悟り型の発話行為には悟りのモードが、お話し型の発話行為にはお話しのモードが備わることになるわけである。

参考文献

- 安達 太郎 1999『日本語疑問表現における判断の諸相』くろしお出版
- 尾上 圭介 1973「文核と結文の枠」言語研究 No.63
- 尾上 圭介 2001「文法と意味 I」くろしお出版
- 澤田美恵子 2001「『も』の解釈－夏も終わりですねー」日本言語学会第123回大会予稿集
- 澤田美恵子 2007『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版
- 寺村 秀夫 1981「上級文法教本 第四分冊」三友社
- 寺村 秀夫 1982「日本語のシンタックスと意味 I」そのⅡ (1984) そのⅢ (1991) くろしお出版
- 中右 実 1979「モダリティと命題」(『英語と日本語と－林栄一教授還暦記念論文集－』、くろしお出版、所収)
- 中右 実 1994『認知意味論の原理』大修館書店
- 仁田 義雄 1979「日本語文の表現類型」(『英語と日本語と－』林栄一教授還暦記念論文集－、くろしお出版、所収)
- 仁田 義雄 1991『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄・益岡隆志編 1989『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 仁田義雄編 1995『複文の研究 (下)』くろしお出版
- 野田 尚史 1989「真性モダリティを持たない文」(仁田ほか編1989、所収)
- 野田 尚史 1995「文の階層構造からみた主題ととりたて」(益岡ほか1995、所収)
- 蓮沼 昭子 1991「ヨウダ・ラシイ・ダロウ」(『日本語教育論集』吉田弥寿夫監修、学習研究社、所収)
- 蓮沼 昭子 1995「対話における確認行為－『だろう』『じゃないか』『よね』の確認用法」(仁田編1995、389－419頁)
- 蓮沼 昭子 2004「認識的モダリティとレトリック」日本語教育連絡会議論

文集 Vol.16、pp10～12

- 蓮沼 昭子 2006「譲歩の談話と認識的モダリティ」(『言外と言内の交流分野』小泉保博士傘寿記念論文集、大学書林、所収) 455～469 頁
- 蓮沼 啓介 2007a「コミュニケーション的理性の批判」神戸法学雑誌56-4
- 蓮沼 啓介 2007b「規範と発話行為」神戸法学雑誌57-4
- 林 四郎 1960『基本文型の研究』明治図書
- 三上 章 1960『象は鼻が長い』くろしお出版
- 南 不二男 1974『現代日本語の構造』大修館書店
- 南 不二男 1993『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 2002『モダリティ』新日本語文法選書4、くろしお出版
- 益岡 隆志 1987『命題の文法』くろしお出版
- 益岡 隆志 1991『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志・野田尚史・沼田善子編 1995『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
- ルー マン 1993『社会システム理論』佐藤勉訳、上。下 (1995)。恒星社厚生閣
- Grice,Paul. Meaning, Philosophical Review 66, 1957
- Kuroda,S.-Y. A formal theory of speech acts, Linguistics and Philosophy 9, pp.495 - 524, 1986
- Kuroda,S.-Y. An explanatory theory of communicative intentions, Linguistics and Philosophy 12, pp.377 - 388, 1989
- Luhmann,Niklas. Soziale Systeme, Suhrkamp,1987
- Searle,John. Speech acts, Cambridge University Press,1969